

「永遠の美しさも」 「遊び心」も必要、 それがジュエリー

第81回アカデミー賞授賞式において、6度目のオスカーノミネートにして初の主演女優賞の栄冠に輝いたケイト・ウィンスレットは、ワンショルダーの青いドレスに、ダイヤモンドをちりばめた「シヨパール」のイヤリングとプレスレットで装っていました。

大ぶりのペア（洋梨シェイプのイヤリングは、骨太な力強さを感じさせるケイトの美しさを絶妙のバランスで引き立て、彼女に新オスカー女優としての威信さえ与えていました。ペアはその実が心臓の形に似ているところから、情愛のシンボルでもあります。「愛を読むひと」というこのうえなく深い愛の映画におけるケイトの演技の余韻と、王者にふさわしいジュエリーの品格、迫力あるジュエリーに負けないケイトの成熟美。この三者があいまって、ケイトの存在そのものがポエトリー（詩）のように感じられたことを、今も鮮やかに思い出すことができます。

古来、ときに神聖視され、ときに畏れられながらも、ジュエリーが愛され続けてきたのは、それが理屈では説明できない感情や、秘められた思いをたつぷりと引き受けてきたからでもあります。支配者の権力や富の象徴としてだけではなく、魔除け、護符、信仰の対象、奉納品、褒章、愛の証……など、時間とともにあせることのない（あせてほしくない）思いをずしりと吸い込んだシンボルとして、ジュエリーは輝き

を失うことはありませんでした。

だからこそ、ふざかしいジュエリーをていねいに選び、身につけたひとは、そのたたくまいにポエトリーを感じさせることがあるのです。生産性やら効率やら経費削減やらの散文化的な雑事に心身をすり減らさねばならない日々にあればこそ、人間にとつて最も大切であり続けてきた「思い」をになう神秘的なジュエリーが、少なくともそれを身につける人の心を、散文の世界から詩の世界へと導いてくれることがあります。その効果が、詩的な美しさの雰囲気として外ににじみ出るものでしょう。

とはいえ、永遠に変わらぬものだけでは退屈してしまうのも、また人間の真実。ジュエル（Jewel）の語源をたどっていくと、「遊び、冗談」という意味に出合います。不変の思いの象徴を慈しむことも大切だけど、ときにはちよつとジョークのように宝石と戯れてみましょうよ、という先人のウイソクを感じ取らずにはいられません。

王道をいくジュエリーをまとうことでポエトリーを醸し出す豊かさももちろんながら、遊び心あるジュエリーを楽しむお茶目な親しみやすさもある。宝飾品店の販売員はよく「ジュエリーが、人を選ぶ」という表現を用いますが、そんな多面性を備えた女性こそ、まさしくジュエリーに選ばれる女性なのかもしれません。

Nakano Kaori

エッセイスト・服飾史家。東京大学大学院、英国ケンブリッジ大学客員研究員を経て文筆家に。著書に『愛されるモード』など。明治大学特任教授としてファッションを講じている。

リング「スリーストーン・クラスター」
[PT×ダイヤモンド] ¥3,690,000（ハリー・ウィンストン）
ブラウス ¥56,700（マックスマラー ジャパン（マックスマラー））

◀心に残る
ジュエリーの真実は
次のページから!